

杉山 賢治

Alan S. Miller

本研究では2つの研究を行っている。閉ざされた環境と開かれた環境の一般的信頼をアメリカにおいて比較するもの(セクション1)。その研究の結果現れた現象(閉ざされた環境に住む者が高信頼であった)を説明しようと探索的に研究を行ったもの(セクション2)である。

セクション1では山岸の理論の実証研究を行った。山岸らは、信頼の日米比較調査から、機会コストが高く社会的不確実性の存在する、開かれた環境で生活する者は高信頼者であり、コミットメント関係が存在し社会的不確実性の低い、閉ざされた環境で生活する者は低信頼者(安心)としている。そこでアメリカ国内においてもこの理論が適用できるか調査を行った。結果は、モルモン教徒によってのみ構成される、閉ざされた環境であるBYUの学生の方が、開かれた環境で生活するUCLAの学生より、高信頼者であった。これは閉ざされた環境で生活する者は一般的信頼が低いという仮説を棄却する結果であった。

そこでセクション2において、BYUの高信頼の原因を探るためモルモン教徒の信頼について探索的に研究を行った。それらから、モルモン教徒の高信頼はモルモン教の教義の影響ではなく住んでいる環境によって生まれている。またBYUの学生は、基本的に人間は善良であると認識しており、社会的不確実性の認知が低いことがわかった。そしてBYUは閉ざされ閉ざされた環境であると言いきれないこともわかった。またスタークの研究から、モルモン教徒は、外界とのネットワークが存在し世界各地で活発な宗教活動を行う、開かれた社会で行動している、それとともに宗教内でのコミットメント関係の強い社会的不確実性の低い閉ざされた環境で生活していると議論している。これはモルモン社会の閉ざされた環境と開かれた環境の二面性を示している。

これらの研究からBYUの高信頼は特殊な生活環境によって発生したということが出来る。つまりモルモン教の布教を世界各地でおこなった高信頼者の特性を持つ生徒が、BYUという同じ宗教を信じるものの集まった宗教的斉一性の存在する社会的不確実性の低い環境で生活した結果現れたものであると考えることができる。またこの研究はBYUでは信頼と安心が混在しているとし、“開かれた社会”に“宗教的斉一性”が加わったとき高い信頼が生まれる可能性を指摘するものである。